



背筋を伸ばしてピシッといこう

1年生は、五色台集団宿泊学習(11月29日～12月2日)に行ってきました。テレビやゲームのない生活の中で、集団生活のルールやマナーを学び、共に生活することのよさを実感することができたと思います。天候にも恵まれ、野外体験学習や野外炊事などの活動を通して、入学時よりもたくましく成長した姿を見ることができました。2年生は、今日の5校時に職業体験授業(自動車整備士、インテリアコーディネーター、グラフィックデザイナー、ゲームクリエイター、調理師、保育士・幼稚園教諭、理容師・美容師の7コース)を受けました。きっと働くことの喜びや厳しさなどを感じ取ることができたと思います。1月に行われる職場体験につながるいい学習になったことでしょう。3年生は、私立高校受験に向けての面接練習をしました。中学校生活の思い出や高校生活に期待することなどを考える中で、改めて自分自身を見つめることができたと思います。また、服装や言葉遣いなど、普段の生活の大切さを実感したことでしょう。

どの学年も、様々な体験を通して、多くのことを学んでいます。そして、そのすべてに共通しているのが何事も基本が大事だということです。それは、小さな子どもから、小学生、中学生、そして大人にいたるまで、すべての人に当てはまることなのです。(『説間子ども宣言』は、人としての基本をまとめたものです) 季節は冬。寒さに負けず、背筋を伸ばしてピシッといけば、気持ちまでシャキッとすればす。

基本ができていないのに、いきなり野球やサッカーの技術を教えてもうまくなるはずがない。100年に1人出るか出ないかの天才は例外として、世界的な名声を博すピアニストでも最初はバイエルからピアノを始めたはずだ。高層ビルがそうであるように、高く上に伸びれば伸びるほど、基礎工事は地中深く行う必要がある。何事も基本が大事だという話である。

その「基本」とは意外と意外とシンプルなもので、たとえば、小学校1年生になるまでに身に付けておくべきものだったりする。

先日、京都の辻中公さんから『魔法の日めくりメッセージ』をもらった。辻中さんは幼児教育の専門家で、その『魔法の日めくりメッセージ』も幼児向けにつくられたものだが、1枚1枚めくっていくと、大人の自分にできていないことがあまりにも多いことに気づき赤面してしまう。

1枚目、「朝、歯を磨こう！顔を洗おう！」。うん、これはできている。

2枚目は「一緒にお部屋を片付けようね」。おっと、ここからもう危ない。コメントの所に「部屋の乱れは心の乱れにつながります。片付けをすることで空間が整い、心も整理できるので良いエネルギーが部屋に充満します。・・・」とある。

「目を見てあいさつしてるかな？」というものもある。目、見ていないよなあ。

「お話は最後まで・・・」というのはどうだろう。「相手の話が終わるまでしっかり聴くことで、自分より相手を優先することが出来、注意深く聴き取る力、集中力が身につく、習慣化すると人をまとめる力、リーダーシップ力にもつながります」というコメント。この国のリーダーにも送りたいメッセージである。

ほおーと思ったのは、「靴をそろえようね」。コメントには「一度しゃがんで靴をそろえるのは、けじめをつけ、それぞれ物事にはルールがあることを認識する動作です。靴をそろえることで、けじめが付き、ルールを守ろうという意識が向けられます」とある。そうだったのか、知らなかった。

「落ちているゴミを拾いましょう！」は17枚目に出てくるメッセージ。自然を大切にするとか、環境美化のためではない。誰も見ていなくても、勇気を持って恥ずかしがらずに自分の意思を貫いて行動に移す。これが習慣化されると、「自尊心が芽生え、自分に自信が持て、何でもやってみよう」と挑戦できるようになります」とのこと。へー、ゴミ拾いにはそういう意味があったのか。

23枚目は、「旬のものを食べようね」。幼児期から「旬」の意味を知ることは重要だ。「旬を通して四季を感じ、四季を感じると情緒を感じることができる」という。

コメントも含めて読んでいくと、単なるしつけのための日めくりじゃないことに気づく。実は、辻中さんは易学の専門家で、そのエキスが行間ににじみ出ている。幼児向けに描かれているが、「これは侮れない」と思った。

つまり、これらは人生の基本なのだ。基本さえ幼児期に習慣化されていれば、将来、どんな道でも花を咲かせることができるのではないだろうか。

何をするにしても、人生の基本を離れて成功はない。28枚目のメッセージもいい。とても幼児向とは思えない。「背筋を伸ばそう！ピシッといこう！」

※「日本一心を揺るがす新聞の社説」(みやざき中央新聞編集長 水谷もりひと著)から引用

人権といじめ

詫間中3年 上村美加

私たちの生活の中には、学校や会社でのいじめ、拉致問題、男女差別など「人権」を無視した行為が多く見られます。「人権」とは、誰もが生まれながらに持っている自分らしく生きる権利のことです。この権利を無視し踏みにじる行為は、決して許されることではありません。そして、なくしていかなくてはならない私たちの課題でもあるのです。

昨年、私が中学2年生の時、香川県教育委員会主催の「いじめゼロ子どもサミット」の実行委員として活動しました。このサミットは香川県内の小中学生が協力して、自分たちから行動を起こし、自分たちの手でいじめをゼロにしようという意識を高めるために行われました。このサミットを開催するにあたって、まず私を含む21人の実行委員が集まり、自分たちの学校でのいじめの現状や「人権」に対する意識の持ち方や「人権」に関する活動などの情報を交換し合いました。幸い重大問題となっているいじめの情報はありませんでしたが、ちょっとしたトラブルがいじめに繋がっているというケースは、やはり多いようです。ある一人の生徒がこんなことを言っていました。「いじめがいけないことだということは誰もがわかっている。ではなぜいじめは亡くならないのか。それはきっといじめているという自覚がその子にはないから」

このサミットでも、いじめはいじめられた人が精神的な苦痛を感じているもの、ととらえています。つまり、いじめている人がいじめていると思っていなくても、いじめられた人が精神的な苦痛を感じていたら、それはいじめであるという考えです。またよく耳にするのが、いじめられる方にも責任がある、という意見です。しかし、どんな理由があろうと、いじめられる側に過ちはないのです。サミットでそのことをしっかりと伝え、香川県内すべての小中学校の代表者でいじめについて真剣に考えました。

いじめの多くは4つの層からなっているそうです。いじめられている被害者といじめをしている加害者、そしてまわりではやし立てたり喜んだりして見る観衆、見て見ぬふりをしている傍観者です。いじめをああおったり面白がったりして、積極的にいじめを認めている観衆や、見て見ぬふりをして関係ないふりをしながら、結果的にはいじめの応援団になっている傍観者も十分に関係しています。また、これらの人たちには自分がいじめの当事者であるとは思っていません。しかし、この行為が被害者に精神的な苦痛を与えているのは確かです。被害者にももちろんある「人権」を他の3つの層の人たちは平気で無視しています。自由に生きる権利を奪っているのです。

いじめは時として一人の人間を死に追いやる卑劣な行為です。よくニュースで話題になる、子どもの自殺問題も学校などで受けたいじめが関係していることもあります。軽い気持ちで行ったことが一つの尊き命を奪ってしまうのです。きっと、そこまで大きなこととは考えずに行われているのが、いじめなんだと思います。自分がいじめていた人が死んでから、初めて自分の過ちに気づくのでは遅いのです。そのような状況になってしまった人は、一生被害者の死を背負って生きていくことになるのです。それはあまりにもつらい人生を送ることだと思います。

いじめは、一見被害者だけが傷ついているように見えます。しかし、加害者や観衆、傍観者もいじめに関わることによって、自分の気づかないうちに心に傷を負っているのです。人の痛みを知ることのできる心が傷ついているのです。それは人間としてとても悲しいことなのです。お互いに傷ついてしまういじめに、何もいいことはありません。そのことにみんなが早く気づくべきだと思います。私の周りではいじめは見られません。おそらくみんなはいじめがいけないことだということを知っているだけでなく、何もいいことがない行為だと、理解しているからだだと思います。

私たちはサミットで、『いじめゼロ宣言』というものをつくりました。「相手のことを考える」「相手のことを認める」「自分を大切にする」「自分のこととして考える」「みんな仲間助け合う」の5つです。5つとも「人権」を守るために必要なことです。この宣言が世界中に伝われば、きっといじめから戦争まで悲しい出来事はなくなるでしょう。

いじめゼロの学校、いじめゼロの香川県、そしていじめゼロの世界を目指して行われたサミットを、無意味なものにしないよう、「人権」の重要性をよく考えながら生活していきたいです。